

学位論文

文化会館の構造転換

必要性とその方向

Strukturwandel des
BUNKA KAIKANs

昭和58年3月

清水 裕之

目次

序章	〈研究の概要〉	8
第1節	研究の目的, 方法, 位置付け	9
	1) 研究の目的	9
	2) 関連する 既往の研究と本研究の位置付け	10
第2節	本論文の概要	13
第3節	文献リスト	18
	1) 参考文献リスト	18
	2) 既存発表研究リスト	24
	3) 研究報告書リスト	24
	4) 著書, 雑誌掲載論文リスト	25
第1章	〈文化会館の概要〉	26
第1節	文化会館とは	27
	1) 文化会館の概念とその変遷	27
	2) 本論文で文化会館を扱う視点	31
第2節	文化会館の概況	32
	1) 文化会館の設置概況	32
	2) 文化会館の施設概況	38
第3節	まとめ	65
第2章	〈文化会館をめぐる文化行政〉	67
第1節	はじめに	68
第2節	文化振興会議にみる文化行政	71
	1) 文化行政の目標に関する問題	72
	a) 文化行政の役割と対象	72
	b) 文化行政と地域とのかかわり	79
	2) 文化行政の根拠の確立に関する問題	82
	a) 文化振興長期総合計画	82
	b) 文化振興法の確立の是非	84
	c) 文化庁の省への格上げの是非	90
	3) 文化行政機権の充実にに関する問題	91
	a) 行政の文化化	91
	b) 文化行政を担当する部局の充実・調整	93
	c) 国, 都道府県, 市町村の文化行政の役割分担・ネットワークの確立	99
	d) 専門の職員の充実	108
	e) 財政上の補助	112
	4) まとめ	113

第3節	文化振興会議にみる文化事業	116
1)	自治体からみた文化事業	117
	a) 自治体の文化事業の事例	117
	b) 自治体の文化事業の考え方と問題点	123
	c) 参加する文化活動等補助金(文化庁)	132
	d) 文化庁主催の巡回劇場	134
2)	文化会館からみた文化事業(自主事業)	142
	a) 文化会館の文化事業の事例	142
	b) 文化会館の文化事業の考え方と問題点	146
	c) 財政上の問題点	152
	d) 観客の動員・事業のPR	155
	e) 自主事業と貸館の関係	158
	f) 文化会館と国・自治体・他の文化会館との役割分担・ネットワークの確立	161
3)	その他の文化事業	164
	a) 公民館活動	164
	b) 学校における文化事業	165
4)	まとめ	166
第4節	文化振興会議にみる文化団体	169
1)	文化団体	170
	a) 文化団体の種類, 規模, 範囲	170
	b) 自治体にみる文化団体の育成の方向	176
	c) 文化団体の育成の方策	178
	d) 文化団体への補助金	181
	e) 文化団体の指導者	185
2)	文化協会	188
	a) 文化協会の役割と機能	188
	b) 文化協会への組織化	190
	c) 文化協会の運営	192
	d) 文化協会の中の文化団体のあり方	195
3)	まとめ	197
第5節	文化振興会議にみる文化会館	199
1)	文化会館の目的と行政上の位置付け	201
	a) 文化会館の設置目的	201
	b) 文化会館と行政機構との関係	207
	c) 文化会館相互の連携	209
	d) 文化会館と他の施設の連携	212
2)	文化会館の施設計画のあり方	214
	a) 文化会館の分布基準	214
	b) 多目的ホールか専用ホールか	215
	c) 大ホールか小ホールか	219
	d) 練習場	221
	e) 設計における指導体制・利用者の設計参加	223
	f) 施設整備の補助金	225

3)	文化会館の職員及び運用組織	227
a)	文化会館の職員	227
b)	文化会館の財団法人化	233
c)	文化団体の会館運営への参加	235
4)	文化会館の利用条件に関する問題	237
a)	利用手続、優先利用、利用制限等	237
b)	定期活動、倉庫利用、舞台練習等	244
c)	利用時間	246
d)	使用料金、入場料金、物品の販売	248
5)	文化会館の施設の維持、管理、防災	253
a)	設備の保守	253
b)	施設の美しさの維持	255
c)	施設の防災	256
6)	まとめ	257
第6節	まとめ	260
第3章	〈文化会館をめぐる舞台芸術活動〉	266
第1節	はじめに	267
第2節	東京都における舞台芸術活動と文化会館	269
1)	調査の目的、対象、方法等	269
a)	調査の目的と対象	269
b)	調査対象の位置付け	270
c)	調査の方法	270
d)	上演種目及びホールの種分け	271
e)	調査件数	274
2)	調査の内容	275
a)	調査対象の上演種目別の内訳	275
b)	調査対象のホール種別の内訳	279
c)	調査対象の客席数の内訳	284
d)	上演種目と上演場所	293
e)	最高料金、最低料金	297
f)	舞台芸術活動と地域	313
3)	まとめ	321
第3節	世田谷区内の区民会館の利用実態	323
1)	調査の目的、対象、方法等	323
a)	調査の目的と対象	323
b)	調査対象の位置付け	325
c)	調査の方法	325
d)	調査の内容	327
e)	施設の概要	327
2)	区民会館の利用実態	328
a)	利用団体の属性	328
b)	ホール利用の目的、動機	335
c)	ホール利用における手続及び施設上の問題点	341
	4	

	d) 公演前のホールにおけるリハーサル及び仕込み, として後片付け	347
	e) 企画・制作・稽古のスケジュール	351
	f) 大道具・衣裳及びスタッフのあり方	357
	g) 舞台芸術振興に対する区への期待	361
3)	上演種目及び団体の種類と利用形態	362
	a) 上演種目と団体の種類	362
	b) 演劇・ミュージカル, オペラ等	363
	c) バレエ・現代舞踊	364
	d) 民謡, おどり, 日本舞踊等	365
	e) ホンポラ - 音楽コンサート	366
	f) クラシック音楽コンサート	367
	g) 合唱・独唱	368
	h) ピアノ, バイオリン等おける教室発表会	369
	i) 学校や地域の文化祭	370
	j) 団体の種別による相違	371
	k) 公演までの稽古活動	376
4)	まとめ	380

第4節 地方を主体とした文化会館の利用・運用・管理実態

1)	はじめに	383
2)	地方を主体とした文化会館の利用概要	386
	a) 施設構成	386
	b) 利用分野	387
	c) 利用団体の種類	388
	d) まとめ	390
3)	地方を主体とした文化会館の管理運用状況	391
	a) 管理運用組織	391
	b) 自主事業	399
	c) 施設の貸出, 利用年続等	403
	d) 職員の勤務時間と会館運用	407
	e) 公演の為の技術運用	413
	f) 観客サービス	418
	g) 施設計画上の諸問題	420
4)	巡回公演と文化会館	439
	a) 巡回公演の実態	439
	b) 巡回公演の問題点と文化会館のあり方	446
5)	まとめ	450

第5節 劇団から見た文化会館の実態

1)	調査の目的, 対象, 方法等	451
	a) 調査の目的	451
	b) 調査の対象, 方法等	451
2)	調査対象劇団の属性・特徴	452
	a) 劇団の属性	452

	b) 劇団の施設及び劇団運用の概要	462
3)	地方公演の概況と諸問題	465
	a) 地方公演の概況	465
	b) 地方公演における公共ホールの施設の問題点	471
	c) 地方公演における公共ホールの管理・運用面の問題点	474
4)	劇団の年間観客動員数, 公演回数, 公演場所等	478
	a) 年間観客動員数	478
	b) 年間公演回数と地方公演率, 本拠地公演率	479
	c) 公演場所と公演頻度	487
	d) 劇団にとって上演しやすいホールの客席規模	503
	e) まとめ	507
第6節	まとめ	512

第4章 <舞台芸術活動のシステム> 522

第1節	オープンシステムによる制作, クローズドシステムによる制作	523
第2節	クローズドシステムによる西ドイツの公共劇場	525
	1) 西ドイツ公共劇場の概要	525
	a) 分布と規模	525
	b) 公演数と観客動員	531
	c) 職員	540
	d) 運用経費と収入・補助金	547
	e) 入場料金	554
	2) 西ドイツ公共劇場の組織・運用	555
	a) 組織構成	555
	b) 公演スケジュール	564
	c) 1日の劇場運用スケジュール	574
	d) 作品の出来るまでのスケジュール	579
	3) 西ドイツ公共劇場の施設構成	583
	a) 施設構成の概要	583
	b) ダルムシュタット州立劇場	586
	c) カールスルーエ州立劇場	597
	4) 西ドイツのランテスタター, 市民ホール	605
	a) ランテスタター	605
	b) 市民ホール	608
	5) まとめ	619
第3節	オープンシステムによる日本の舞台芸術活動	623
	1) 舞台芸術活動に関わる各種組織の構成	623
	a) 舞台芸術団体の組織構成	623
	b) 劇場の組織構成	634

	1) 舞台芸術活動の補助組織	641
	2) 舞台芸術の制作組織とプロセス	643
	a) 舞台芸術の制作組織	643
	b) 制作プロセス	646
	3) まとめ	653
第4節	まとめ	656

第5章 <文化会館の構造転換の必要性和その方向> 659

第1節	はじめに	660
第2節	文化会館の構造転換	663
	1) 文化会館から公共劇場へ	663
	a) 我国の舞台芸術活動の特徴と問題点	663
	b) 舞台芸術に関する文化行政の特徴と問題点	668
	c) 従来型の文化会館における舞台芸術活動の限界とその克服(公共劇場の必要性和可能性)	672
	d) 公共劇場のモデルスタディ	681
	2) 文化会館の多様化	691
	a) 多様化への指向	691
	b) イベント型の市民ホール	692
	c) ミニコンサートホール	694
	d) 伝統芸能センター	696
	e) 市民の文化活動に対する学校施設の有効な開放	698
	f) その他の可能性	699
	3) まとめ	700

結語

1)	今後の研究の展望	701
2)	謝辞	702

序章 研究の概要

1節 研究の目的、方法、位置付け

1) 研究の目的

*1) 舞台芸術
本論文では演劇
舞踊、音楽など、
舞台を利用し発表
上演を行う芸術分
野を総称して舞
台芸術と言う。

筆者は10年近くにわたり、舞台芸術^{*1)}に関わる施設、つまり劇場に関心を抱き続けてきた。そして、その過程で、次第に文化会館という存在に注目するようになった。というのは、舞台芸術に携わる人々と話をすると、必ず文化会館の批判が出てくるからである。

文化会館は、舞台芸術の関係者からは常に悪者として扱われ、正統な劇場施設とは認知されていないように思われる。しかし、その批判を行うということ自体、文化会館に対する舞台芸術の切実な期待感の裏返しであると受けとることもできよう。

本論文では、いったい何ゆえに、文化会館が舞台芸術から目の敵とされるのか、何をして文化会館と舞台芸術に対して対立しきめなくさせているのか、それは、どのようにすれば解決するのかを徹底的に解明することをひとつの目的としている。

他方筆者は、現在の形の文化会館は、劇場となり得ない何か別の性格があるのではないかと感じ続けてきた。社会的に非劇場的な期待も負わされているのではないかと。本論文では、それが何であるかということも同時に明らかにすることも目的に含めている。

上記の目的のためには、既存の文化会館の様を越えて、多様な角度から総合的な視野で分析を行う必要がある。特に文化会館の設定の背景にある文化行政の考え方、そして、舞台芸術の特性について考察は欠かすことが出来ない。

本論文は上記の観点に立って、文化会館の抱える問題点を総合的に検討し、今後の可能なあり方を提示することを目的としている。

2) 関連する 既往の研究と本研究の位置付け

文化会館を研究対象とする場合、そのアプローチの方法には2種類ある。ひとつは劇場建築からのアプローチ、もうひとつは集会施設の一類型としてのアプローチである。劇場建築の研究としては小泉嘉四郎の『劇場舞台設計計画』の研究、小谷喬之助の『オープンステージの劇場について』の研究が代表的である。前者は劇場を舞台技術の側面から体系的に考察したものであり、後者は劇場空間の特性をオープンステージ形式を中心に考察したものである。これらの研究は、一般的な劇場を対象としたものであり、特に文化会館については言及していない。文化会館を劇場建築の立場から直接、考察の俎上に上げた研究論文は少ない。興味深い一連の研究としては伊東正示の『多目的ホールのネットワーク化に関する研究』、日本大学小谷研究室による『東京文化会館におけるオペラ上演記録研究』が見られるが、いずれも研究途中でまた最終的な形をまとめられるに至っていない。文化会館については設計手引書としてまとめられたものに意味深いものがある。たとえば、佐藤武夫による『公会堂建築』(昭41年3月)は現在でも文化会館建築の手引書として文化行政関係者、建築家のバイブル的な役割を果たしている。また最近のものでは日本建築学会編『多目的ホール舞台設計資料』(昭56年9月)、彰国社編『集会・催し施設』(昭56年5月)、砂川幸雄編『市民会館』(昭56年7月)、三原醇吾『文化施設(会館)建設の構想と実際』(昭56年8月)などがあげられる。このうち佐藤武夫の『公会堂建築』は当時としては文化会館に関して講堂に類する性格のものから舞台芸術にも対応できる多目的ホール化への路線を提示したということ、特に際立っており、ひとつの研究論文とみても価値の高いものである。しかし、発行されて以来16年経過した現在では既に古典的なものとなっている。三原醇吾のものは、氏が建築家ではなく、文化庁文化部文化普及課時代に文化会館の補助金交付を担当した行政官としての立場からの見解をまとめたものとして異色であり、現在の文化会館の行政上の位置づけと期待についてうまくまとめられて

113。彰国社編『集会、催し施設』は、文化会館を数多く設計して
いる建築設計事務所の人々によってまとめられているだけあって、設
計実務遂行上の手引書としては傑出して113。建築学会編のものは
劇場研究者が中心になり文化会館の劇場化を促進する方向でまとめ
られたものである。しかし全体的にみると佐藤武夫以後、総合的視
野に立脚した文化会館そのもののあり方に対する根本的な問いかけは
なされな113まま現在に至っている。

次に集会施設の一類型としてのアプローチについてである。これに
ついては、建築計画の一大部門を構成するもので、数多くの研究者
が関連した研究を行っている。ただし、これらは、たとえば「ホワイ
エにおける群衆流動や便所の規模算定の根拠を定める研究など、人
の多く集まるという施設特性に対する研究あるいは、学校や公民館
館など一連の公共施設の地平における地域施設としての研究が主体
である。従って、ここでも文化会館そのものについて正面から扱っ
た研究は少ない。そうした中で文化会館に対して新鮮な視点を提示
して非常に意味深いものに、森田孝夫の『集会施設の建築計画に関す
る基礎的研究』(昭56年)がある。氏の研究は集会施設の役割が
自治活動から地域福祉へと、文化・芸術に関するものへと変化して
来ていることを認識した上で、集会施設の種類、規模、使われ方、
運営方法を考察し、その体系化及び地域との関係の定量的な把握を
目指したものである。この意味で、氏の研究は集会施設の立場から
文化会館に対しても、それを正面から扱ったものとしてユニークである。

本研究は、このような既往の研究をふまえて、文化行政や舞台芸術
活動の特性までも考察の範囲に入れ、文化会館を総合的視野で捉え
ている点に特徴がある。森田孝夫の研究が集会施設としての観点か
ら文化会館にも、総合的な考察を及ぼしているものとするなら、筆
者の研究は、主として舞台芸術の立場から文化会館のあり方に総合
的なアプローチを試みたものとする事が出来る。

詳しくは、舞台芸術の制作プロセスにオーガニズシステムとクローズ
ドシステムのふたつの方向があることを提示し、我國の舞台芸術活

動が基本的に前者のシステムに立脚していること、そして文化会館も、そのシステムの一員として組み込まれていること、従って文化会館の問題は文化会館という狭い枠内で捉えている限り解決できない性格を持っていることを明示したことに意味がある。また将来の文化会館のあり方に展望を与えるため、文化会館の劇場化と多様化というふたつの軸を示し、それぞれ具体的なモデルの提示を行っていることにも意味がある。

さらに、これらの考察に際して、新しく建設される文化会館の設計指針を提示するばかりでなく、既存の文化会館をいかにより良く機能させるかという点の考察にも大きな比重を置いてしているのも特徴である。というのは筆者は、施設建設が一段落しかけている現在、今後は新規に建設される施設よりもむしろこれら既存の施設における運用面の問題が大きくクローズアップされてくると考えるからである。

また本論文は演劇学の分野でも未開拓な、いわゆる演劇組織論、あるいは演劇政策論とでもいうべき分野に対してもひとつの研究の方向を提示しえるものと考えている。

なお、最後に本研究は武蔵工業大学田辺研究室との一連の共同研究の成果でもあることを付しておきたい。

2 節 本論文の概要

〈概要〉 本論文は「文化会館の構造転換—必要性とその方向—」と題し、既存のタイプの文化会館の抱える諸問題を主として舞台芸術の施設としての観点から指摘し、その発想転換の必要性と方向を提示しようとするものである。

本論文は序章を除き、5つの章で構成されている。「第1章」ではまず、文化会館の成立概念、その歴史的な変遷を概括し、本論文で文化会館を扱う視点を定めている。そして次に、施設形態、規模、分布状況等、文化会館の現状についての概要を把握している。「第2章」では文化会館及び舞台芸術活動をめぐる国・都道府県・市町村の文化行政についてその基本的な考え方を整理し、問題点を指摘している。「第3章」では、筆者が参加して行った各種の調査を中心に文化会館をめぐる舞台芸術活動の状況を把握し、その問題点を指摘している。「第4章」では、文化会館という枠を一度離れて、我国の舞台芸術活動を西ドイツの公共劇場における舞台芸術活動と比較し、その創造方式、創造組織及び劇場利用の考え方の違いなどを考察する。そしてそのことによって我国の舞台芸術活動の基本的な特性と問題点を明らかにしている。「第5章」では第1章から第4章までの考察をふまえて、文化会館の問題を総合的に捉え直し、それに対する解決の方向をいくつかのモデルスタディによって提示している。

〈第1章〉本章は3節によって構成されている。第1節では文化会館の概念とその変遷を考察し、それは初期の講堂的な性格のものから次第に舞台芸術の上演の為の施設へと流動的に変化してきたこと、そして現在もその概念は定まらず、流動性の強いことを指摘している。従って本論文で扱う視点も強い枠をはずし、弾力的に捉えることを提示している。第2節では既存のデータを基に文化会館の設置状況、施設概要を考察している。第3節ではその結果をまとめた。文化会館は、全国的にかなりの密度で整備されてきていること、舞台芸術を主たる対象として考えているか、他の文化チャンネルも総合的に扱おうとしていること、舞台芸術を中心に考えていること、

ても施設内容から判断すると、その創造活動というよりもむしろ完成されたものの上演を主たる対象として考えていることなどが指摘された。

〈第2章〉本章は6節から構成されている。第1節では本章の考察の基礎資料として使用した、文化庁主催による一連の文化振興会議の報告書の概要とそれを選取した理由などを示した。第2節では文化行政の目標、根拠、機構等の概要とそこに生じている問題点について文化振興会議の発言の中から整理し考察した。第3節では国や地方自治体、そして文化会館の行っている文化事業について舞台芸術を中心にして文化振興会議の発言をもとに整理し考察した。第4節では文化行政と市民の文化活動の接点として重要な役割を果たしている文化団体、あるいは文化協会について文化振興会議の発言の中から整理し問題点を考察した。第5章では上記の考察を受けて、文化振興会議の発言の中から、文化行政による文化会館の位置づけ、文化会館の施設計画の考へ方、職員及び運用組織、利用条件等について整理し、その問題点を考察した。第6節ではその結果をまとめた。本章を通して明らかになった主要な点を示すと次のようになる。

- 1) 我國の文化行政は全体的に貧弱である。
- 2) 文化会館は複雑な文化行政機構の狭間にあつて不安定である。
- 3) 文化会館は貸館指向と自主事業優先指向の狭間にあつて不安定である。
- 4) 文化会館の活動は、他の組織の協力がなければ推進できない性格のものである。しかし、文化会館自身にはそうした認識が乏しく管理規制主体の考へ方をしている。
- 5) 地方における文化行政の課題はプロの活動とアマチュアの活動のバランスをいかに確保するかにある。しかし、現在の文化会館の活動は、アマチュアへの視点が主体となり、地方に最も欠けているプロの舞台芸術の創造への視点に欠ける嫌がある。

〈第3章〉本章は6節から構成されている。第1節では、本章で扱う内容の概要を示した。第2節では「情報紙ひまわり」の分析をもとに東

京都における演劇を主とした舞台芸術活動の現状とそれに対する文化会館の寄与の程度について考察した。第3節では、都内における舞台芸術活動と文化会館との関係についてさらに詳細に分析する為、世田谷区の区民会館の利用実態を調査考察した。また、舞台芸術の種類による文化会館の利用形態の違いについても考察した。第4節では地方における文化会館の利用、運用、管理実態について考察した。また、地方における文化会館の特徴的な使い方である巡回公演の状況についても考察を行った。第5節では、上記の考察を利用者としての舞台芸術団体の角度から補足するために、劇団活動の実態調査を行い、その活動の特徴及び文化会館の利用状況並びにそれに対する不満などを考察した。第6節では、上記の結果をまとめ、現在文化会館が抱えている問題を整理した。その主要な点をまとめると次のようになる。

- 1) 文化会館は何かというイメージが希薄である。
- 2) 文化会館の総合性とは何かは、きりしな。い。
- 3) 文化会館の没個性的な性格が目立つ。
- 4) 文化会館を建てれば、芸術文化の振興が達成されたというよな施設建設偏重の文化行政が目立つ。
- 5) 文化会館の性格が集会場なのか芸術文化の振興施設なのかその区別がは、きりしな。い。
- 6) 文化会館における自主事業と貸館事業が混乱している。
- 7) 文化会館における利用者の概念がは、きりせず、機会均等の原理が杓子定規にあてはめられ、悪平等の現象を起している。
- 8) 文化会館は多目的性を強調しているがそれは逃げの多目的性であり積極性に欠ける。
- 9) 文化会館の運用組織が舞台芸術の創造上流にそぐわな。い。
- 10) 文化会館では公演期間が長くとれない仕組みになっている。
- 11) 文化会館の施設規模は大きすぎるものが多い。
- 12) 文化会館には舞台芸術の制作費の概念が乏しい。
- 13) 地域におけるアートの活動とアマチュアの活動の調整がとれてな。い。

- 14) 文化会館の我國の舞台芸術活動における役割に対する総合的な視野に立つ認識が弱い。
- 15) 文化会館がその機能を果たすために協力の必要な他の組織、機構とのインターフェースのルールが確立してはいる。
- 16) 文化会館のネットワークが確立してはいる。
- 17) 文化会館の計画にあたって設計者の舞台芸術への無理解に起因する設計上の不備が改善されてはいる。

<第4章>本章は4節から構成されてはいる。第1節では、我國における舞台芸術の制作システムを幾多の組織の協力の必要なオープンシステムとして定義し、単独で全ての機能を遂行できる西ドイツの公共劇場のクロースドシステムと対峙して考察を行う理由を示した。第2節では西ドイツの公共劇場についてその概要、組織及び運用の方法、施設構成などを考察した。また、その機能を補足するものとしてランデステアターや市民ホールについても言及した。第3節では、我國の舞台芸術活動についてその組織のあり方、制作プロセス等について考察を行った。第4節は上記の結果をふまえて、両者の比較検討を行い、我國の舞台芸術活動の抱える問題を指摘した。その問題点を記すと次のようになる。

- 1) 制作プロセスが分断され、全体の統一をとることが難しい。
- 2) ホールを借用して上演を行う為、舞台稽古や仕込みが圧迫される。
- 3) 技術の蓄積、改良の回路が成立しにくく技能が向上しない。
- 4) 施設が羊の肉に入らなのまま使用することが多く、劇場空間や技術設備を使いこなした制作がしにくい。
- 5) 舞台芸術団体が支払う見かけ上の制作経費は小さいが、潜在的なロスが大きい。

そして、これらの欠陥は、我國の舞台芸術が民間の手で生存してゆくために創られたオープンシステムが構造的に抱えてはいる欠陥であり、これらの欠点をカバーし、長所を伸ばしてゆくには、何らかの公的支援が必要であることを示した。

<第5章>本章は本論文の結論にあたり2節によって構成されては

る。第1節では、本論文の一連の考察をふまえて、文化会館には舞台芸術振興文化政策の一環としての役割への期待と各種文化的催し物に市民が気軽に使える施設としての期待という異なる期待がかけられてくること、このふたつの期待の異質性は施設が充実するほど開いてゆくことを示した。そして、今後文化会館は、この期待に答えるため、劇場化の方向と多様化の方向に進むであろうことを示した。第2節ではそれを受けて、まず、劇場化の方向に進むには、文化会館はどのような構造の転換が図られるべきかについて、具体的な県立劇場構想というモデルを提案して検討考察を行った。次に多様化に対しては、今後考えられるであろう新しいタイプの文化会館あるいはその代用施設として、イベント型の市民ホール、ミニコンサートホール、伝統芸能センター、市民の文化活動に対する学校施設の開放などを提案した。

3節 文献リスト

国内文献 1) 参考文献リスト

文献No.	文献名	著者	出典, 出版社名	発表年
1	集会施設の建築計画に関する基礎的研究	榛田孝夫	大阪大学学位論文	昭和56年
2	多目的ホールのネットワーク化に関する研究1	伊東正示他	建築学会 関東支部研究報告書	昭和56年
3	同上 その2 ~ その4	同上	建築学会 大会梗概集	昭和56年
4	同上 その5, 6	同上	同上	昭和57年
5	実馬演劇場研究 その1	伊東正示他	同上	昭和56年
6	実馬演劇場研究 その2	同上	同上	昭和53年
7	実馬演劇場研究 その3	同上	同上	昭和54年
8	実馬演劇場研究 その4	同上	同上	昭和55年
9	舞台空間の考察 - オラホリス ゴッドノフ, フィデリオを通して -	本杉省三 小谷喬之助	同上	昭和52年
10	フロセニウム開口と平面的サイトライン について - 東京文化会館におけるオラ上演記 録を研究を通して -	本杉省三 小谷喬之助	同上	昭和53年
11	オーケストラピットにおける楽器編 成と配置 - 東京文化会館におけるオラ上演記 録を研究を通して - その3 -	本杉省三 小谷喬之助 桜井経温	同上	昭和55年
12	フロセニウム周辺の動態について - 日生劇場におけるオラ上演記録を 通して -	小谷喬之助 本杉省三	建築学会 関東支部研究報告書	昭和53年
13	児童演劇における上演空間の建築 計画に関する研究 (その1, 学校巡回 公演の上演実態調査)	梶 芳晴 小谷 喬之助	建築学会 大会梗概集	昭和56年
14	児童演劇における上演空間の建築 計画に関する研究 (その2, アメリカ合 衆国における children's theatre の 研究)	同上	同上	昭和57年
15	オーディトリウムにおける上演傾向と舞 台面積に関する研究 (多目的ホール 計画のための研究・1)	早川光正	同上	昭和56年
16	公会堂建築	佐藤武夫	相模書房	昭和41年

文献No	文 献 名	著 者	出典, 出版社名	発表年
17	オーパンステージの劇場に7112	小谷喬之助	日本大学学位論文	昭和47年
18	劇場舞台設計計画	小泉嘉四郎	近代建築社	昭和40年
19	文化施設(会館)建設の構想と実際	三原醇悟		昭和56年
20	集会・催し施設 建築計画チェックリスト	彰国社編		昭和56年
21	多目的ホール舞台設計資料	日本建築学会編	彰国社	昭和56年
22	市民会館	砂川幸雄編	南洋堂出版	昭和56年
23	建築設計資料集成 4 単位空間Ⅱ	日本建築学会編	丸 善	昭和55年
24	建築設計資料集成 7 建築 - 文化	同上	同上	昭和56年
25	新建築学大系 33 劇場の設計	田辺健雄, 小谷喬之助, 吉井澄雄, 関口克明 和山浩一	彰国社	昭和56年
26	特集 ホール建築は, 11ま	内井昭哉, 吉井澄雄 浦林亮次等	建築画報 155	昭和56年
27	ホール図録 '69~'79	日本劇場技術協会編		昭和54年
27	特集: 劇場 オハラハウス の空間と創造のために	清水裕之, 伊東正示, 榎秀樹, アドルフ・ツォツマン 等	彰国社	昭和57年
30	GA からさお 劇場建築 特集号	立定彦, 清水裕之, 山崎 泰孝, 和山浩一, 浦林亮次 伊東正示等	綜建築研究所	昭和56年
31	特集 オハラと演劇のための施設	小谷喬之助, 吉井澄雄, 小玉功, 石井聖光, 和山浩一 等	公共建築 88・89	昭和56年
32	ドイツの劇場建築と舞台機構	アドルフ・ツォツマン 教授懇談会記録	公共建築 94	昭和57年
33	音-建築の原点に立って音の諸問題を 考える	榎秀樹, 永田穂 等	建築雑誌 Vol. 97	昭和57年
34	特集 劇場の音響	小谷喬之助, 永田穂, 吉 井澄雄, 和山浩一 等	音響技術 Vol. 11 no. 1	昭和57年
35	ツォツマン教授講演録(シン ホツウ4)「現代の劇場技術」	アドルフ・ツォツマン	劇場技術 No 54	昭和57年
36	西独 オハラハウスのレポートリ ーに7112	小山隆一	同上	同上
37	西ドイツのオハラハウス	平尾力哉	劇場技術 No. 50	昭和56年
38	会館建築計画の引き 第1章 企画の立て方	河野邦彦	劇場技術 No 25	昭和50年

文献No.	文 献 名	著 者	出典, 出版社	発 表 年
39	会館建築計画の引きき 第2章 会館建築の傾向	佐々木 群	劇場技術 No26	昭和50年
40	会館建築計画の引きき 第3章 都市と会館	河野 邦彦	劇場技術 No27	昭和51年
41	公開座談会 公共ホールの舞台機構をめぐって	久保則男, 内山千吉, 村 瀬慶高, 小西敏正, 本 多達夫, 又田悦夫, 天野 万助	劇場技術 No33	昭和52年
42	公共ホールの舞台あれこれ	柘植貞光	劇場技術 No33	昭和52年
43	子どもの文化と環境 (3)	全国子ども劇場おや こ劇場連絡会		昭和57年
44	労働運動	阿部文勇・菅井幸雄 編	乙すろす双書 61	昭和45年
45	Monolog II 1942と15年	加藤 衛	よはま演劇叢書 No5	昭和57年
46	芸能人の生活と意識 -芸能人実態調査報告書-	社団法人日本芸能実 演家団体協議会		昭和49年
47	芸能人の生活と意識 -第2回芸能人実態調査報告書-	同上		昭和54年
48	地方自治体と演劇助成(上)	土方与平	フアト誌, No443	昭和55年
49	同上(下)	同上	フアト誌, No444	同上
50	座談会記録 「劇団の給与・諸手当・社会保障 などについて」	新人会, 東京芸術座, 文 学座, 人形劇団70-7, 演劇集団円, 青年劇 場 制作者	日本新劇経営製作 者協会福祉班	昭和53年
51	地方芸術文化振興会議報告書 (昭和44年度)	文化庁文化部 文化普及課編		昭和45年
52	同上 (昭和45年度)	同上		昭和46年
53	文化振興会議報告書 (昭和46年度)	同上		昭和47年
54	同上 (昭和47年度)	同上		昭和48年
55	同上 (昭和48年度)	同上		昭和49年
56	同上 (昭和49年度)	同上		昭和50年
57	同上 (昭和50年度)	同上		昭和51年

文献No.	文献名	著者	出典, 出版社	発表年
58	文化振興会議報告書 (昭和51年度)	文化庁文化部 文化普及課		不明
59	同上 (昭和52年度)	同上		昭和54年
60	同上 (昭和53年度)	同上		昭和55年
61	同上 (昭和54年度)	同上		昭和56年
62	地方文化行政状況調査報告書 (昭和53年度)	文化庁文化部		昭和55年
63	芸術祭15年史	文部省社会教育局 芸術課編		昭和36年
64	芸術祭30年史	文化庁文化部芸術 課編		昭和57年
65	芸術文化に関する意識調査	日本余暇文化振興会		昭和52年
66	地方文化施設の運営状況に 関する調査	同上		昭和54年
67	地方文化施設の利用状況に 関する調査	同上		昭和54年
68	芸術文化団体の運営に関する実態 調査	同上		昭和56年
69	首都圏における舞台芸術鑑賞活 動に関する実態調査	同上		昭和56年
70	公共施設状況調 (昭和56年版)	地方財務協会		昭和57年
71	公共施設財源便覧 (第2次改訂版)	横田光雄 牧隆壽	きょうせい	昭和55年
72	社会教育調査報告書 (昭和53年度)	文部省		昭和55年
73	地方自治職員研修・総合特 集・文化行政読本			昭和56年
74	人間都市への復権	磯村英一監修 坂田期雄編集	きょうせい	昭和57年
75	自治体における行政改革	同上	きょうせい	昭和57年
76	地方自治の可能性 ユリスタ 総合特集		有斐閣	昭和55年
77	行政機構シリーズ" No105 文部省	教育社編	教育社新書	昭和54年
78	行政機構シリーズ" No113 自治省	同上	同上	昭和56年
79	都市の文化行政	総合研究開発機構 上田篤編	学陽書房	昭和54年

文献No	文献名	著者	出典・出版社	発表年
80	教育文化行政	石山努	ぎょうせい	昭和55年
81	社会教育ハンドブック	社会教育推進全国協議会編	総合労働研究所	昭和54年
82	図解 地方自治法 (第4版)	大橋茂二郎監修	地方自治新書 長書普及会	昭和56年
83	文部法令要覧 (昭和55年版)	文部省大臣官房総務課編	ぎょうせい	昭和54年
84	国立劇場法規集	帝国地方行政学会		
85	東京都世田谷区民会館の設置 および管理に関する条例			昭和34年 (昭和51年)
86	国と地方の文教予算 広報資料102	文部省		昭和56年
87	文化行政必携	文化庁監修	第一法規	昭和45年
88	演奏年鑑 '80	日本演奏連盟編		昭和56年
89	演奏年鑑 '81	同上		昭和57年
90	ぴあ (1年間)		ぴあ株式会社	昭和55年 1~12月
91	二期会公演「アイダ」プログラム			昭和57年
92	劇団東演公演「世の園」プログラム			昭和56年
93	新劇便覧 (1981)		テアトロ	昭和56年
94	公共性の構造転換	ハーバーマス著 細谷貞雄訳	未来社	昭和48年
95	全国ホール名鑑	全国ホール協会		昭和55年
96	全国公立文化施設名簿	全国公立文化施設協議会編		昭和55年
97	地方文化施設整備費補助金 交付施設概要(昭和44~51年)	文化庁文化部文化普及課		
98	同上 (昭和52~53年度)	同上		
99	同上 (昭和53~55年度)	同上		

外国文献

文献No.	文献名	著者	出典・出版社	発表年
F-1	Theaterstatistik 1978/79 14. Heft (ドイツ劇場統計)	Deutscher Bühnen- verein Bundesverband Deutscher Theater		1980
F-2	Theaterszene Theaterbau 1971 - 1975	Deutschen Theater- technischen Gesell- schaft e.V.		
F-3	Theatertechnik	Walther Umruh	Klasing & Co., Berlin	1969
F-4	Theaterbau - Aufgabe und Planung	Gerhard Graubner 他	Georg D.W. Callwey, München	1968
F-5	Theater und Orchester zwischen Marktkräften und Markt Korrektur	Erika Wahl-Zieger	Vandenhoeck & Ruprecht	1978
F-6	Sonderheft. 1980		Bühnentechnische Rundschan 特別号	1980
F-7	Der Spielplan 1978年9月号~ 1979年8月号	Schmücking 編	Der Spielplan, Braunschweig	1978~ 1979
F-8	Mehrzweckräume in der Bundesrepublik	Jan Fiebellkorn	Bühnentechnische Rundschan 1976/5	1976
F-9	Versammlungsstättenverordnung (Land Nordrhein-Westfalen)	Land Nordrhein - Westfalen (TH)		1969
F-10	Theaterbau in der Bundes- republik Deutschland	Theatermuseum München		1977
F-11	Theater heute	Werner Hallmorgen	Das Beispiel, Darmstadt	1954
F-12	Die Gruppe und das Stadttheater	Jochen Schmidt	Theaterheute Heft 10/79	1979
F-13	Deutsches Bühnen Jahrbuch 1979 (舞台年鑑)		Der Genossenschaft Deutscher Bühnen- Angehörigen	1979
F-14	kultur für Alle	Hilmar Hoffmann	S. Fischer	1979
F-15	Geschichte des Theaters	Herbert A. Frenzel	dtv Wissenschaft	1979
F-16	Deutsche Theatergeschichte	Hans Knudsen	Kröner	1970
F-17	Rund um die Oper	Bayerische Staatsoper	Blätter der Bayerische Staatsoper	1978
F-18	Sind unsere Theater zu teuer?	Hannes Rettich	Bühnentechnische Rundschan 1976/4	1976
F-19	Sind unsere Theater zu billig?	Michael Hampe	同上 1976/5	1976
F-20	Was ist billiger zu machen?	Walter Hunek	同上	同上
F-21	Theatre Planning	Roderick Ham	The Architectural Press, London	1972

2) 既存発表研究リスト

No.	研究	研究者, 共同研究者	出典	発表年
1	芸術空間論序説 西洋及び日本の古典的な 芸術空間の構造を見る・演 じる関係により比較考察	清水 裕之	東京大学修士論文	昭和50年
2	芸術的空間(現代劇場に 於ける観客と演技者の関係 の見直しの為に)	清水 裕之	建築学会 梗概集	昭和51年
3	舞台・客席の関係の定量的把 握に関する研究(その1) プロセニウム形式の劇場に おける舞台空間と客席空間 の視覚結合の特性と望席 率という概念により定量化し ようとする試み	清水 裕之 田辺 健雄 金子 和雄 花香 博之	建築学会 梗概集	昭和52年
4	ダラムジュタット州立劇場舞台 技術部門の一日の作業実態 当該劇場に1ヶ月滞在し その技術運用の実態を調査 したものの報告	清水 裕之	建築学会 梗概集	昭和56年
5	東京都世田谷区内の区民会館 のホール実態調査(その1) 世田谷区内の4つの区民会 館の利用実態をホール借 用者へのアンケート調査を通 して把握しようとしたもの	清水 裕之 佐藤 修 広瀬 彰 高橋 鷹志 田辺 健雄 内田 祥哉	建築学会 関東支節研究報 告集	昭和57年
6	東京都世田谷区内の区民会館 のホール実態調査(その2)	同上	同上	同上
7	東京都世田谷区内の区民会館 のホール実態調査(その3)	同上	同上	同上
8	東京都世田谷区内の区民会館 のホール実態調査(その4)	同上	建築学会 梗概集	同上

3) 研究報告書リスト

No.	報告書名	研究者	提出先	発表年
1	世田谷区の区民会館(センター) のホール利用者実態調査報告 書	高橋 鷹志 清水 裕之 他	世田谷区役所	昭和57年
2	伝統芸術関連施設調査 報告書	山崎泰孝(A&Iイン スティテュート)と共同作業	横浜市	昭和57年

4) 著書、雑誌掲載論文リスト

No.	題名	内容	掲載紙名	発表年
1	単位空間Ⅱ・「舞台・客席」 執筆委員	舞台・客席空間の設計資料	日本建築学会編 『建築設計資料集成』	昭和55年
2	建築文化「芸能」 幹事、執筆委員	劇場の設計資料	『同上 第7集』	昭和56年
3	「西ドイツの多目的ホール」 (海外ネットワーク)	西ドイツの多目的ホールの動向について概説	新建築 1981年2月号	昭和56年
4	「戦後の劇場建築」 「日本における専用劇場の可能性」	年表 日本における専用劇場の可能性とありかについて考察	GA ガラス81-2	昭和56年
5	特集「劇場：オラハウス、その空間と創造のために」企画総括及び執筆	オラハウスの空間構成、その意味、運用組織等について詳しく記した切	建築文化 1982年1月号	昭和57年
6	「悩める文化会館」	文化会館の問題について	施工 1982年10月号	昭和57年
7	「多目的ホール舞台設計資料」 建築学会、劇場小委員会委員	多目的ホールの設計資料	日本建築学会編 彰国社刊	昭和56年